

名前日共康ノ付見御事・後見

音周王才松道勝

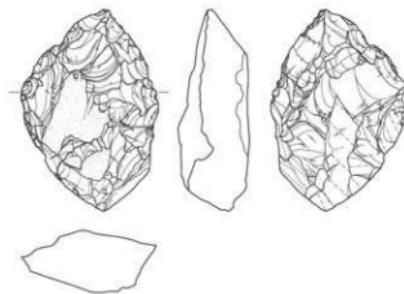
一月木立の事・後見御事・名前御事

名前日共・名前御事・タヨコ万

茨城県石岡市

部原五本松遺跡

— H26 農村交流基盤整備事業に伴う発掘調査 —

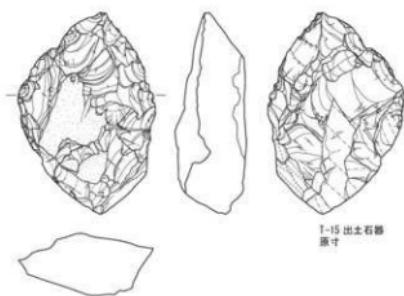


2015

茨 城 県
石 岡 市 教 育 委 員 会
有 限 会 社 勾 玉 工 房 Mogi

へ ば ら ご ほ ん ま つ い せ き
部原五本松遺跡

— H26 農村交流基盤整備事業に伴う発掘調査 —



2015

茨 城 県
石 岡 市 教 育 委 員 会
有 限 会 社 勾 玉 工 房 Mogi

序

石岡市には、397箇所もの「遺跡（埋蔵文化財包蔵地）」が存在しています。埋蔵文化財は、われわれの祖先の生活を知る貴重な財産にあたりますが、工事や開発により一度破壊されてしまうと二度と元に戻すことができません。石岡市としても、その意義や重要性をふまえ、保護保存に努めているところです。

本書で報告されます「部原五本松遺跡」は、平成25年11月の試掘調査によって新たに発見された遺跡です。今回の発掘調査では、奈良時代までさかのぼる可能性のある道跡が発掘されました。

今回調査した場所は、地元で「瓦会街道」と呼ぶ古道沿いにあります。瓦会街道は、江戸時代に府中藩主が日光に参拝するための街道「宇都宮街道」の一部にあたり、奈良時代には部原の瓦塚窯から国府・国分寺へと屋根瓦を運搬した古道と言われています。

今回の調査で見つかった道跡は、この「瓦会街道」と考えることができます。発掘されたのは30m余りで、「瓦会街道」のごく一部分になりますのが、考古学的な所見を得ることができた初めての調査になります。

このような成果をあげることができましたのも、調査にあたりご理解とご協力を賜りました事業者、土地所有者、関係各位のみなさまのおかげであり、心から感謝申し上げます。

本書が学術的な研究資料としてはもとより、石岡市の歴史に関する理解を深め、ひいては教育・文化の向上の一助として、広くご活用いただければ幸いです。

平成27年3月

石岡市教育委員会
教育長 櫻井 信

例　言

- 1 本書はH26農村交流基盤整備事業に伴い発掘調査を行った部原五本松遺跡の調査報告書である。
- 2 調査は石岡市から業務委託を受けた有限会社勾玉工房Mogiが実施した。
- 3 調査内容及び調査組織は以下のとおりである。

所 在 地	茨城県石岡市部原1-41ほか		
調査面積	約500m ²		
調査期間	発掘作業 平成26年10月18日～平成26年11月1日 整理作業 平成26年11月4日～平成27年3月20日		
調査指導	石岡市教育委員会 教育長 櫻井 信 同課長補佐 櫻井 浩司 教育部長 鈴木 信充 同課係長 安藤 敏孝 次長 大関 敏文 同課係長 小杉山大輔 文化振興課長 武石 誠 同課主幹 谷仲 俊雄		
調査主体者	有限会社 勾玉工房Mogi 取締役 大賀 健		
調査担当者	長谷川秀久 (㈲勾玉工房Mogi・日本考古学協会員)		
発掘参加者	飯塚秀子 磯山孝一 郡司勇 小池一司 小玉明子 佐賀剛 佐賀実 鈴木敏信 高野美智子 滝田一徳 田中正治 露久保三郎 西澤京子 藤田美代子 持田清 山本あさ子		
4 本書の執筆は、谷仲、長谷川、大賀、鈴木 徹 (㈲勾玉工房Mogi・日本考古学協会員)、 石山 啓 (㈲勾玉工房Mogi・同) が行い、編集は谷仲の助言のもと、長谷川と鈴木が行った。			
5 执筆分担は下記のとおりである。			
第1章：谷仲、第2・5章：石山、第3章・第4章遺構：長谷川、第4章第1節：大賀、 第4章遺物：鈴木			
6 発掘作業・遺構の写真撮影は長谷川、遺物の写真撮影を高橋歩美 (㈲勾玉工房Mogi) が行った。			
7 整理作業の分担・従事者は下記のとおりである。			
基礎整理：鈴木・篠原みよ子、遺物実測：鈴木（土器・瓦）、高橋（石器）、探拓：根本、 デジタルトレース・DTP：小野寺智子・鈴木・高橋、調査事務：石山・石橋明子			
8 発掘調査から本書の刊行に至るまでに、次の方々・諸機関からご指導、ご協力をいただいた。 石器の鑑定については、産田恵一氏より教示を受けた。記して謝意を表します。(敬称略) 小松信之 杉山美登利 成田ふみ 谷島はま 比毛君男 松田政基			
茨城県県南農林事務所土地改良部門工務課 沼南測量設計課 (㈲小川重機)			
9 調査に関する記録類及び出土遺物は、石岡市教育委員会が保管している。			

凡 例

- 1 本書に掲載した地図は、国土地理院発行の2万5千分の1地形図「加波山」(平成23年更新)・「岩間」(平成20年更新)・「石岡」(平成12年測量)・「柿岡」(平成19年更新)、石岡市作成の2千5百分の1石岡市都市計画図、陸地測量部測量の2万分の1迅速測図(明治30年)を使用した。
- 2 座標値は世界測地系に基づく平面直角座標IX系により、挿図中の方位は座標北を示す。
- 3 標高は東京湾平均海面(T.P.=Tokyo Peil)を基準とした。
- 4 色調表現は『新版標準土色帖』2008年度版(農林水産技術会議事務局監修・日本色彩研究所色票監修)を用いた。
- 5 挿図の縮尺は以下を基本とした。

遺構：調査区全体平面図1/250 遺構平面図1/100 同セクション図1/60

遺物：石器1/3、2/3 繩文土器1/3 須恵器・瓦1/2

- 6 遺物写真の縮尺は以下を基本とした。

石器1/3、2/3 繩文土器1/3 須恵器 原寸 瓦1/2

- 7 挿図に使用したスクリーントーン及び記号は以下のとおりである。

遺構： [] …硬化面範囲 [] …著しい硬化面範囲

[] …硬化面範囲(セクション) [] …著しい硬化面範囲(セクション)

遺物： [] …須恵器断面

- 8 本書で用いた遺構の略記号は以下のとおりである。

SF：道跡、SD：溝状遺構、SK：土坑、K：搅乱

- 9 本調査の略号は「HGM-2014(遺跡名-調査年次)」とした。遺物の注記は、この略号に統いて遺構またはグリッドの記号番号、遺物取り上げ番号の順に記載した。遺物番号の表記がないものは一括取り上げである。また、試掘調査の出土遺物には「試 HGM H25-41」とトレンチの記号番号を記した。微小な遺物は注記を省き、上記の内容を記した遺物カードを添えた。

本文目次

序・例言・凡例・目次	
第1章 調査に至る経緯	1
第2章 遺跡の地理・歴史的環境	2
第3章 調査の方法と基本層序	8
第1節 調査の方法	8
第2節 基本層序	9
第4章 検出された遺構と遺物	10
第1節 縄文時代の遺物	10
第2節 道 跡	12
第3節 その他の遺構	15
第5章 まとめ	18
参考文献	
写真図版	
報告書抄録	

挿図目次

図1 遺跡の位置と周辺の主な遺跡	3
図2 石岡市若松に現存する石標	4
図3 調査区全体図	6
図4 調査地位置図	7
図5 試掘坑・基本層序	9
図6 縄文時代の遺物	11
図7 SF01・SK01	13
図8 SF01出土遺物	14
図9 SD01セクション	15
図10 SD01	16
図11 SD01出土遺物	17
図12 「瓦会・宇都宮街道」と周辺の環境	19

表目次

表1 縄文土器	11
表2 縄文石器	12
表3 SF01出土遺物	14
表4 SD01出土遺物	17

写真目次

遺構図版 1

- 1 調査前全景（後方に瓦塚窓跡・難台山。南から）
- 2 SD01 遺構確認状況（南東から）
- 3 SF01 最上層路面確認状況（北西から）
- 4 試掘坑 A1 セクション（北東から）
- 5 試掘坑 B（南西から）
- 6 試掘坑 C（南西から）
- 7 試掘坑 D（南西から）

遺構図版 2

- 1 SF01 A セクション（南東から）
- 2 SF01 B セクション（南東から）
- 3 SF01 C セクション（南東から）
- 4 SF01 最下層路面（S1 桁付近、北西から）

遺構図版 3

- 1 SF01 樹（車輪）跡（R1 グリッド、北西から）
- 2 SF01 最下層路面東半部と堆積土（北から）
- 3 SF01 最下層路面全景（北西から）
- 4 SD01 B セクション（南東から）
- 5 SD01 F セクション（北西から）
- 6 SD01 完堀全景（南東から）
- 7 SK01 A セクション（北西から）

遺物図版 1

- 縄文時代の遺物
- SF01 出土遺物
- SD01 出土遺物

第1章 調査に至る経緯

平成 22 年 10 月 27 日、茨城県県南農林事務所より農村交流基盤整備事業（八郷中央 2 期地区）に伴い、「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」照会文書が石岡市教育委員会に提出された。照会地には周知の埋蔵文化財包蔵地は存在しなかつたが、市教育委員会が現地踏査を行ったところ、遺物の散布や地形から遺跡の存在する可能性があることから、試掘調査が必要な旨を平成 23 年 6 月 15 日付で回答した。

試掘調査は平成 23 年 11 月、平成 24 年 10 月、平成 25 年 11 月に実施した。平成 23 年 11 月の試掘調査では中世の城館跡が確認されたことから、平成 24 年度に発掘調査を実施し、報告書を刊行している『野田館跡—農村交流基盤整備事業に伴う発掘調査—』2013 年、石岡市教育委員会・関東文化財振興会株式会社)。

本報告地点の試掘調査は、平成 25 年 11 月 11 日～21 日に実施した。その結果、溝 1 条が確認されたことから、「部原五本松遺跡」として「遺跡発見の通知」を提出了。

その後、県南農林事務所より平成 26 年 6 月 9 日付で、茨城県教育委員会あて「埋蔵文化財発掘の通知について」が提出された。県教育委員会より平成 26 年 6 月 23 日付で、遺構が検出された部分については工事着手前に発掘調査を実施するように通知があった。

これらを受け、部原五本松遺跡の遺構が検出された部分 (500 m²) について、有限会社勾玉工房 Mogi に委託し、発掘調査を実施することとなった。

試掘調査 平成 25 年 11 月 11 日、12 日、21 日に実施した。開発区域内に 32 か所の試掘トレチを設定し、いわゆる関東ローム層まで人力にて掘り下げた (図 3)。調査の結果、溝 1 状 (本調査 SD01 に対応) とピット 1 基が確認された。溝は南に隣接する現道 (瓦会街道及び宇都宮街道) に沿い、溝の南側には部分的に硬化したブロックが確認されたことから、この街道の側溝の可能性が考えられた。その他、T-15 の表土中から槍先形尖頭器 (図 6-7) が検出されたので、周辺のトレチ (T-23・30～32) で粘土層または鹿沼バミス層まで掘り下げたが、旧石器時代の遺構を確認することはできなかった。出土遺物については第 4 章において記述する。

第2章 遺跡の地理・歴史的環境

地理的環境 石岡市は茨城県の県南地域北端に位置し、市域の北西域には筑波山・加波山に代表される筑波山塊に囲まれた柿岡盆地が形成される。山塊からは園部川や恋瀬川などの河川が市域を流れ霞ヶ浦に注ぐ。柿岡盆地を中心とする地域は旧新治郡八郷町に属し、平成17年に石岡台地を中心とした旧石岡市と合併し、現在の石岡市が成立した。標高25～26mほどの石岡台地の西端は筑波山塊の東端にあたる竜神山（標高196m）に面し、竜神山が旧市域の境となっていた。竜神山より北方には愛宕山（標高293m）・鐘軒山（標高218m）・雞台山（標高553m）があり、その山間には園部川・恋瀬川とその支流により開析された谷地が入り組み、微高地から河川流域の低地にかけては緩傾斜地となる箇所もみられ、所々に尾根状の地形が形成される。

部原五本松遺跡は石岡市（旧八郷町）部原に所在する。本調査の範囲は市道B7001号線（以下、「市道」という）に沿い、標高は約54mである。筑波山塊に連なる尾根状の丘陵上にあたり、本調査区と市道は地形に沿った配置となる。雞台山・鐘軒山との間には園部川が東流し、流域の低地は西側へ深く入り組んだ谷地を形成する。このため、調査地点は吾国山に源を発する恋瀬川の上流域である柿岡盆地の外縁というよりは、筑波山塊外縁の園部川上流域の地域と位置づけられる。市道は現在、石岡市柏原に所在する柏原工業団地と桜川市岩瀬や北関東自動車道の主要なインターチェンジ、県西地域への中継地となる市内柿岡へ接続する路線としての役割を担っている。

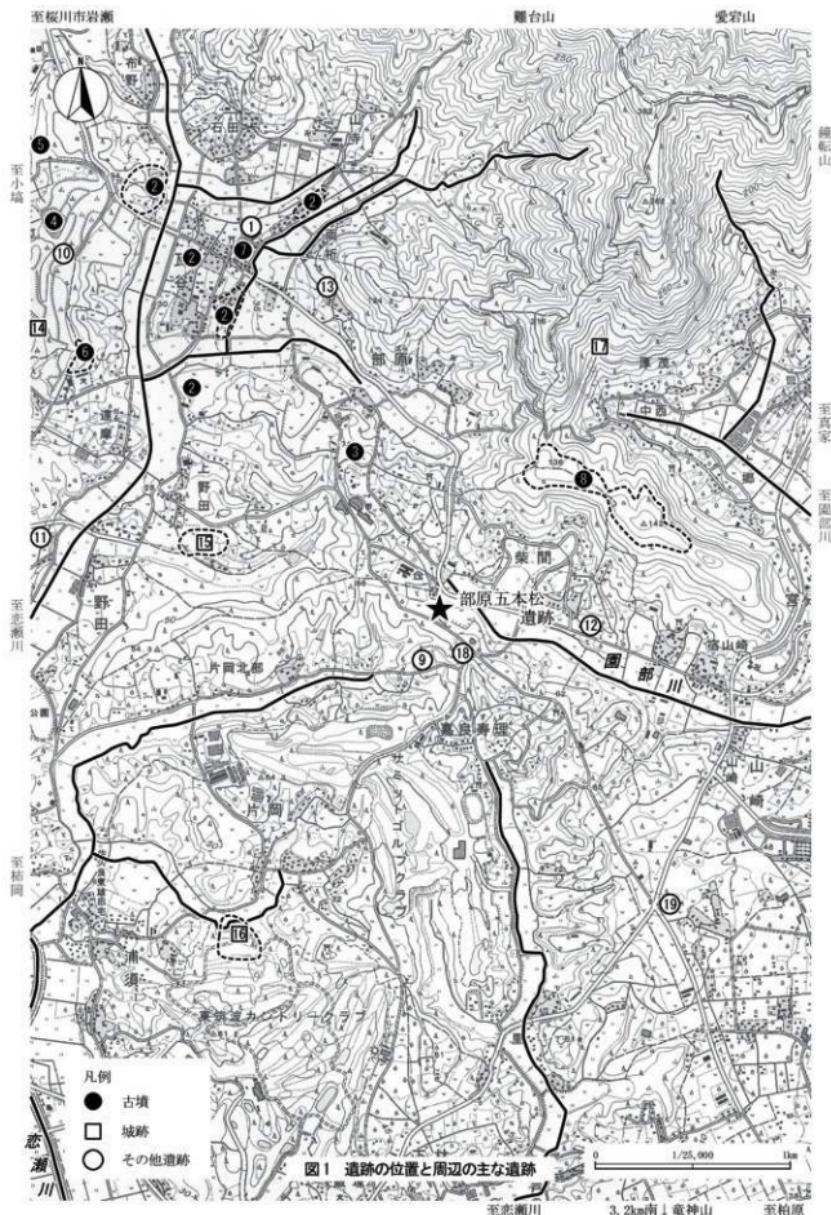
歴史的環境 本遺跡の近辺を中心に述べる。縄文時代・弥生時代の遺跡は、柿岡盆地縁辺の谷地で確認されているが、近辺では矢切遺跡（1）で縄文時代中期の遺物が確認されたほかは調査の実績がない。

古墳時代では、園部川・恋瀬川流域の丘陵上に古墳の分布が顕著である。両水系に近接する瓦会^{かわいらえ}とその周辺には、瓦谷古墳群（2）をはじめとし、和尚塚久保古墳（3）、毛無山古墳群（4）、小塙古墳群（5）、二子塙古墳群（6）、兜塙古墳（7）が密集して分布し、ひとつの大規模な古墳群としての様相を見せる。本遺跡から園部川の対岸、雞台山・鐘軒山に連なる柴間字裏山の丘陵の頂部には18基から構成される厚茂古墳群（8）が存在し、古墳の分布状況からは、地域を代表する二つの河川が象徴的な存在であることがうかがえる。

古墳時代・奈良・平安時代の居住城としては片岡遺跡（9）、毛無山遺跡（10）、佐久松山遺跡（11）、柴間・宮久保遺跡（12）等が周知され、このうち毛無山遺跡が古墳時代のみ、柴間・宮久保遺跡が奈良・平安時代のみの遺跡である。

奈良・平安時代には、現在の石岡市街域に国衙、国分寺・尼寺が置かれ、令制国の諸施設の運営と生産拠点としての機能を果たすために工房が付帯した。鹿の子遺跡群では広大な範囲に生産遺構が確認され、常陸国府の中心的な工房と推測される。また、雞台山麓に存在する瓦塙窯跡（13）では現在までに34基の瓦窯が確認され、8世紀前半から10世紀前半までの操業が明らかになりつつある。

中世になると、恋瀬川・園部川流域に展開する農産の拠点が存在し、柿岡盆地と石岡台地を結ぶ主要な交通路が限られた山地の間を通るために、城館が多く築かれ、本遺跡の近辺では二条山館跡（14）、野田館跡（15）、片岡館跡（16）、厚茂館跡（17）、真家館跡、小塙館跡等が周知される。野田館跡では平成24年に発掘調査が実施され、16世紀より機能し17世紀初頭までに廃城されたことが



^{註1}
確認された。

本遺跡から市道に沿い南東へ300mの地点に位置する嘉良寿理経塚（18）では、「大永三年」（1523）、「甲州高家住道善」の銘が刻まれた銅経筒と石製の外容器が出土した。市内北府中で発見された北谷経塚銅経筒は大永2年（1522）の作製であり、関連性は明らかではないものの、近隣地域の同時期の類例として注目される。

近世においては、市道に沿い南東方向へ1.9kmの林山崎道と接する地点に、さど塚と通称される塚を含むさど塚遺跡（19）が存在する。この塚は古文書により、元和6年（1620）に境界塚として築かれたことが明らかになっており、現状は路線の拡幅工事により一部が掘削される。また、同古文書や元禄郷帳では現在に見られる村落が存在しており、中世城館が廃城され、現在の居住区画が成立した。

当該地は現在は集落域には含まれず、明治30年（1897）陸地測量部測量の迅速測図においても同様である。先述した市道は瓦会街道、宇都宮街道と呼ばれ、市内若松には本道の起点に「右 うつの宮 かわらい 道」、「元文二年」（1737）の陰刻が読める石標が存在し（図2）、石標から本遺跡を経て瓦会に至る道筋を辿ることができる。

以上、本遺跡の近辺を中心に地理的環境と各時代の遺跡を概観した。本遺跡に近接した地域では調査の実績が乏しく、周辺の状況を詳細に知ることはできないが、当地域では古墳時代以降の痕跡が現存もしくは整備され、歴史的景観を形成している様がうかがえる。

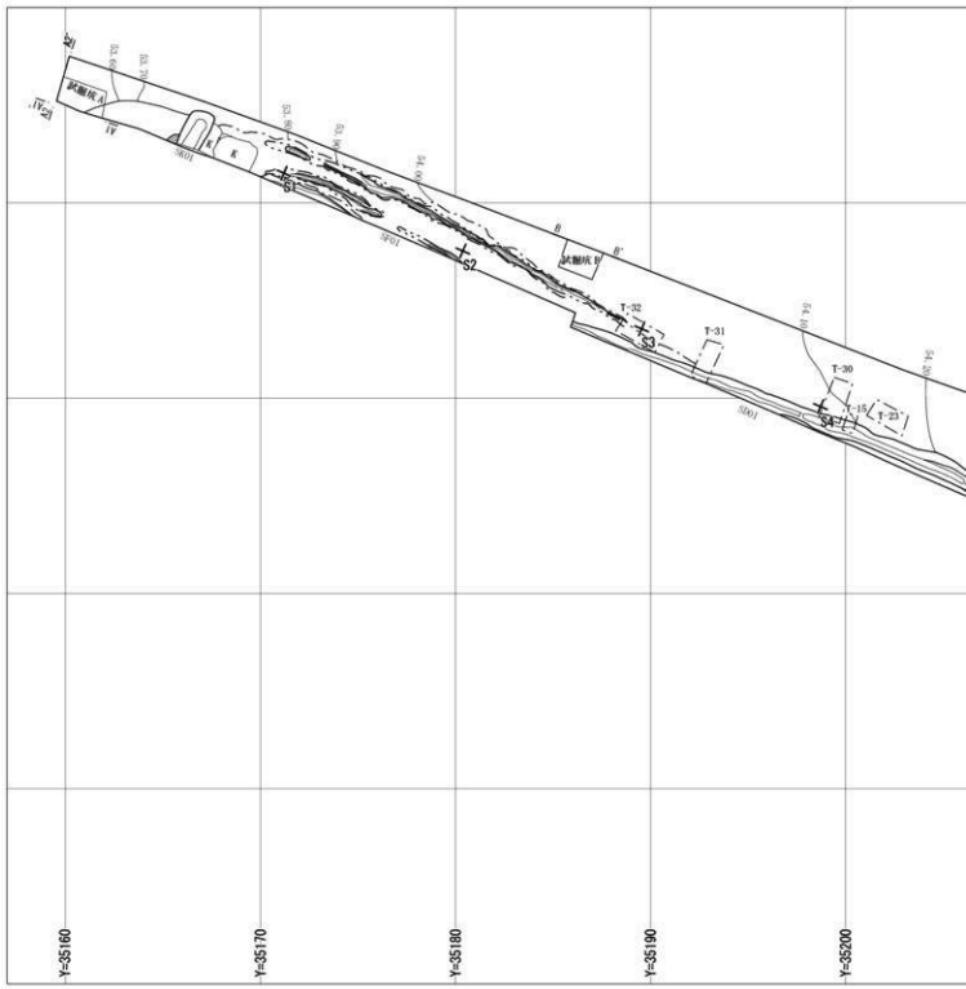
註1 『野田館跡一農村交流基盤整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査』では、野田館主と周辺の城館の城主について調査の成果と近辺に伝承される資料から史的に考察とともに、確認された遺物と遺構の分析から稼動時期を導き出している。また、瓦会街道を当該期において、近辺の小田氏族の城館に佐竹氏が進出する際の経路として推測している。

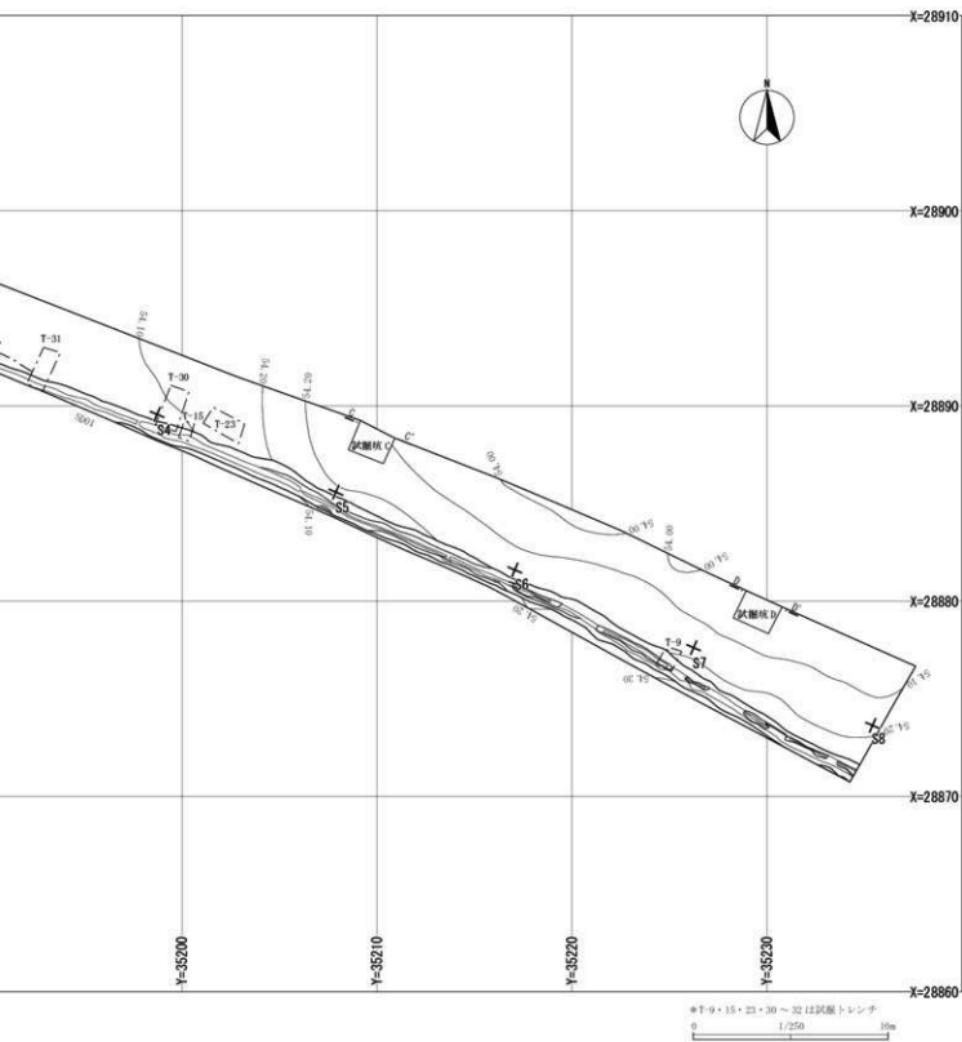
註2 『八郷町の地名』による。同文献掲載の古文書には「一 下林村原地府中ヨリ野邊ニ往来道境右道筋府中原境之道烏瓜村境下林地内ニ道御座候烏瓜村山崎村境入相ニ御座候 元和六年八月九日 墓塚廻六拾間高サト武間」と示されている。

註3 元禄9年（1696）に作成が開始され、江戸幕府勘定所が編集した国ごとの郷帳を指す。本文では『日本歴史地名大系 第8巻』において集成された「行政区画変遷・石高一覧」を使用し、元禄15年（1702）の村落の設置状況を確認した。



図2 石岡市若松に現存する石標





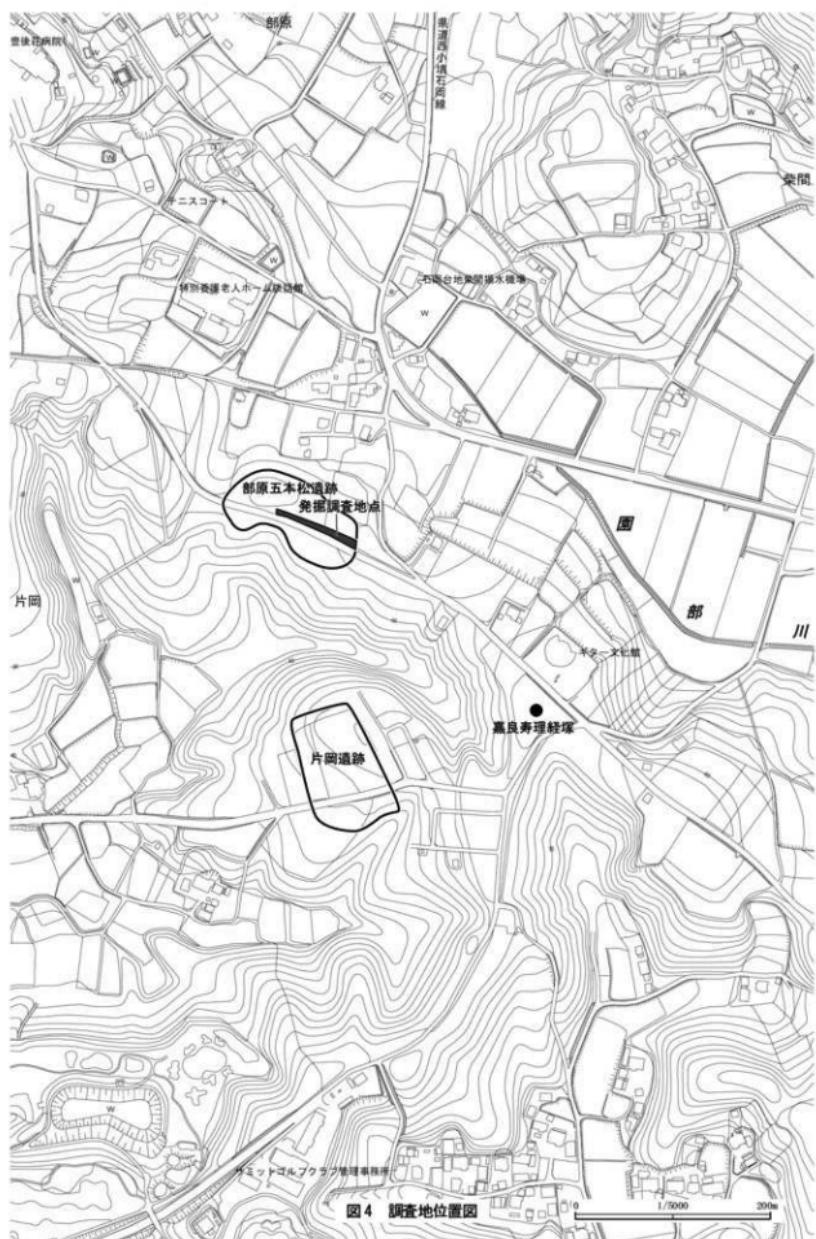


図4 調査位置図

第3章 調査の方法と基本層序

第1節 調査の方法

発掘作業 事業範囲のうち、道跡の側溝と想定される SD01 が確認された範囲の約 500 m²を対象とした。地番は部原 1 番 12、1 番 13、1 番 41 で、調査区は各筆の南端の一部に当たる。調査前の現況は畑地である。

基準点測量は世界測地系平面直角座標（第IX座標系）に基づいて行い、調査区には東西方向（任意）に 10 m 間隔のセンター杭を打設した。杭名は西から S1 ~ 7 とし、グリッドの呼称はセンター杭ラインの南側は北西角の杭名を適用して S0 ~ 7、北側は R0 ~ 7 とした。ベンチマークは調査区西端部 S1 杭（標高 54.032 m）とほぼ中央部（標高 54.300 m）の 2か所に設置した。

表土の掘削は平爪バケットのバックホー（0.4 m³）とクローラーダンプ（4t）を用いて行い、発生土は事業範囲内の調査区外に仮置きした。一部にローム漸移層（第II層）が残っていたが耕作等による掘削はソフトローム層（第III層）の上面まで及んでいる状況であったので、遺構確認は基本的に第III層の上面で行った。確認した遺構には遺構記号（凡例参照）と番号を付して管理した。遺物は表土掘削作業中及び搅乱土から出土したものをお除き、すべて点上げ処理を行って出土位置を記録した。

調査区及び遺構の測量は、上記のセンター杭を基準に平板測量・レベル測量によって行った。縮尺は、遺構確認全体図は 100 分の 1、遺構平面図及び遺物出土状況図は 20 分の 1 を基本とし、必要に応じて 40 分の 1 で作目した。セクション図は 20 分の 1 で作図した。写真撮影は、35mm モノクローム・同カラーリバーサルフィルムカメラ及び 1,200 万画素のデジタルカメラを用いた。

整理作業 注記はインクジェットプリンター（注記マシン）を用いて行い、微小遺物についてはチャック付ポリ袋に遺跡名・調査年次・遺構ないしグリッド記号番号・遺物番号・出土年月日等を記載したカードとともに封入した。接合にはセルロース系接着剤を使用した。遺物実測は手測りで行った。作成した遺構・遺物図面は Adobe Photoshop CS2 へ読み込み、Adobe Illustrator CS2, CS4 を用いてデジタルトレースして Adobe InDesign CS4 で編集し、入稿データを作成した。

調査の経過 発掘作業は平成 26 年 10 月 18 日から同年 11 月 1 日まで、整理作業は㈲勾玉工房 Mogi 本社にて同年 11 月 4 日から平成 27 年 3 月 20 日まで実施した。以下に日を追って記述する。

発掘作業

- 10月 18日 調査区西側から表土掘削作業着手、安全対策。
19日 調査区西側から硬面を確認、東側の溝跡 SD01 に切られている模様。
20日 作業員着任。環境整備ののち遺構確認作業を行う。
21日 測量基準杭を打設。
24日 試掘坑を設定して旧石器調査を行うが、文化層の確認に至らず。
25日 道跡 SF01 と溝跡 SD01 にサブトレレンチを入れて精査開始。
29日 調査区及び遺構の完掘状況を撮影。
11月 1日 調査終了確認の後、機材を搬出。

整理作業

- 11月 4日 遺物搬入、洗浄。
12日 遺物台帳・観察表作成
13日 遺物実測、原稿執筆を開始。以後、断続的に進める。
12月 26日 市教委に初稿を提出。
2月 20日 校正を完了する。印刷所に入稿。

第2節 基本層序

東西約83mに及ぶ長い調査区となったので、その東西両端と中央2か所、計4か所の試掘坑(2×1.5m)を概ね等間隔に設定した(図3・5)。試掘調査において、ローム層中から石器破片と表土中から縄文時代草創期の石器が検出されたので、旧石器時代の構造・文化層の有無に留意しながら人力で掘り下げた。掘削深度は鹿沼バミス層以下まで及んだが、結果、ローム層中でそれらの確認には至らなかった。

4か所のうち、西端の試掘坑Aの堆積土は調査区南西部に存在する谷地へ流れ込む自然堆積土である。第II層はローム漸移層で調査区東端の試掘坑Dにおいて確認されたが、試掘坑B・Cの第III層・ソフトローム層の上面レベルは同Dとはほぼ同じであるので、第III層は大きく削平されていないものと考えられる。第IV層は褐色のハードローム層で、黄褐色の鹿沼バミスを極微量含んでいる。ソフト化が著しく、調査区中央西側の試掘坑Bでは第III層中にブロック状に散在する状況であった。第V層は鹿沼バミスを多く含む褐色のローム層で、第VI層への漸移層となる。第VI層は鹿沼バミス層であるが、試掘坑Bでは確認できなかった。その下の第VII層は暗褐色ローム層で、黒褐色土ブロックを多く含み、やや粘性がある。ところで、第VII層上面レベルは調査区中央西側の試掘坑Bにおいて高く、これが第VI層の流失、第V層々厚の薄さや第IV層の顕著なソフト化として表れているものと思われる。

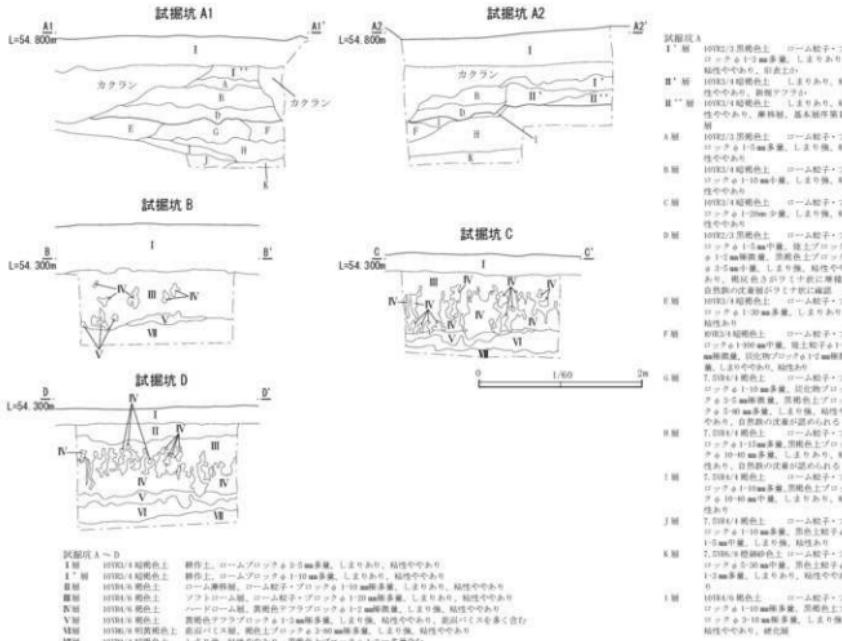


図5 試掘坑・基本層序

第4章 検出された遺構と遺物

本遺跡は前述したとおり、今回の調査を契機として新規に発見された遺跡であり、つまり、本遺跡における初めての発掘調査となる。確認された遺構は、古代あるいは近世（以降）の道跡各1条と土坑1基、現代の溝状遺構1条である。遺物は縄文時代の石器と土器、礫、古代の須恵器細片、中・近世の瓦細片、近世（以降）の陶磁器がある。総量は25点・1,510.6gである。

以下、遺構外の縄文時代遺物と遺構種別ごとに報告する。出土遺物については、礫を除く全17点を掲載する。

第1節 縄文時代の遺物

縄文時代の遺構は確認できず、遺構外及び縄文時代以降の遺構覆土から出土したものである。縄文土器6点・119.2gと石器及び石核・剥片6点・484.6gがある。

土 器 1はほぼ直立する口縁部の破片である。器面は粗い削りが行われ、口唇部はやや平坦に整形される。胎土中には白色粒子が多く含まれる。焼成は良好。器形・整形の特徴から、早期の無文系土器・天矢場式と判断される。

2は斜行する条線、もしくは無節の燃糸文を地文にし、半截竹管による眼鏡状の平行沈線が描かれる。胎土中に白色礫・赤色礫をやや多く含み、焼成は良好。前期末葉の浮島I式土器と判断される。3も斜行条線もしくは無節燃糸文を地文にし、半截竹管の並行沈線による短沈線及び弧状の沈線文様が描かれる。胎土中には白色礫・赤色礫をやや多く含む。2と同一個体の浮島I式土器と判断される。4は平行沈線に沿って半截竹管の背面による刺突列が描かれる。胎土は精良で、焼成良好である。前期末の浮島III式または興津式と判断される。

5は太い沈線によるV字形の区画が設けられる。上端には沈線に沿って角押文が施文される。中期前葉の五領ヶ台式土器と判断される。6は単節LRの縄文が全面に施文され、胎土中には黒（金）雲母が多量に混入している。中期後半の加曾利E I式古段階の胴部破片と判断される。

石 器 7は槍先形尖頭器の未成品である。表面には一部表皮を残し、右側縁から先端にかけては平行剥離による丁寧な加工が施される。背面基部側には筋理面が存在し、左側面から基部にかけては厚みを残して整形を断念している。材質は赤色チャートで、東北地方の朝日連峰地域産と想定される。旧石器末または縄文草創期の大形石槍と判断される。8は槍先形尖頭器の先端部の折損資料と判断した。表面のみ剥離が施され、背面には加工痕が見られない。材質は砂岩起源ホルンフェルスである。この石材は旧石器時代の資料としては、石岡市半田原遺跡においてAT層下位より確認されているが、縄文時代の遺物については現状では研究が進んでいない。

9は小形の石核から剥片を剥がし、背面から打撃を行って基部の抉りを作出する二次的加工が行われている。石鏃の未成品と判断される。全体に厚みがあり、側面への加工はほとんど行なわれていない。材質は星を多く含むもので、目視的には高原山産の黒曜石と想定される。

10は砂岩の石核である。最終剥離面は表皮を打面にしており、方形に近い剥片を剥がしている。概ね表皮を打点とするものの、斜方向や下方からの剥離も見られ、剥離は粗雑である。

11はチャートの剥片である。一部玉隨化している表皮を打面として打ち欠きを行うもので、背面は3枚の剥片が剥がされており、正面の長方形の剥片が最後に剥がされている。二次的な加工は観

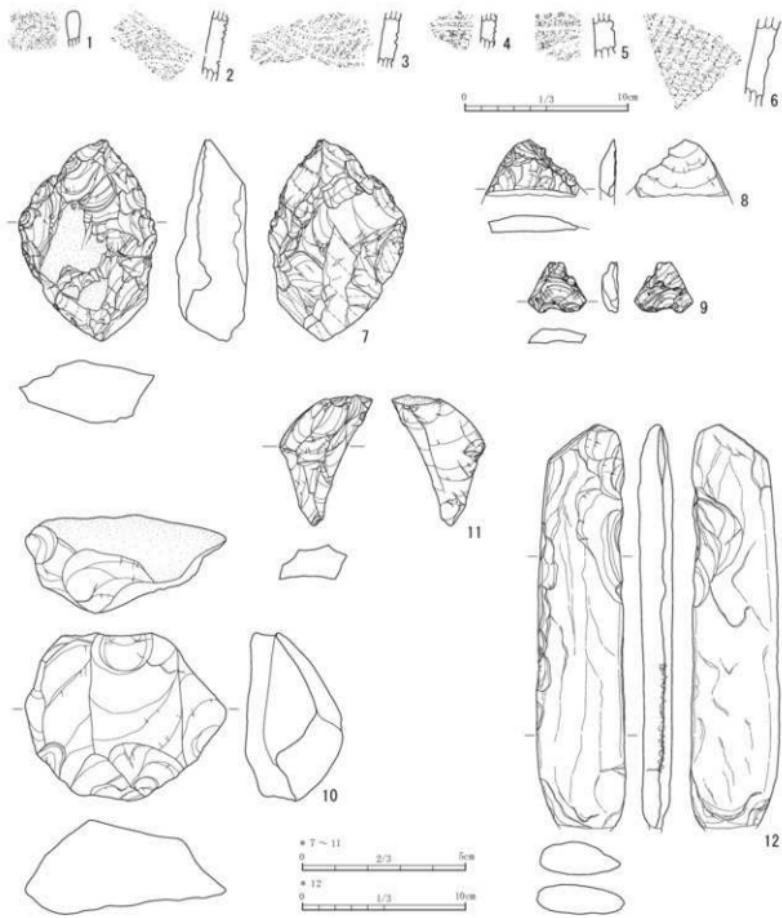


図6 縄文時代の遺物

表1 縄文土器

遺物 番号	遺構	グリッド	注記	標高 (m)	種別	器種	部位	重量 (g)	胎土 (含有物)	焼成	色調	時期	備考
1 SP01	S2	No.7		54.025	縄文土器	深鉢	口縁部	8.6	白雲・透(多)・黒	良好	外:10185.3に2.5cm、黄褐色 内:2.5%に5.5%・黄	早期	
2 SP01	S9	No.8		53.655	縄文土器	深鉢	脚部	18.1	透・白・黒・赤・砂・粘土	良好	外:5386.6に 内:5386.8に	前期	3と同一個体
3 SP01	S9+BD	No.10+11		33.666	縄文土器	深鉢	脚部	29.3	透・白・黒・赤・砂・粘土	良好	外:10185.4に2.5cm、黄褐色 内:5386.6に	前期	2と同一個体
4 S001	T-9	試B2M B2S-41	-	-	縄文土器	深鉢	脚部	6.0	透・白・黒	良好	2.5386.6に	前期	
5 遺構外	S2	-括	-	-	縄文土器	深鉢	脚部	15.0	透・白(多)・砂	良好	外:10185.4に2.5cm、黄褐色 内:5386.4に2.5cm・黄褐色	中期	
6 遺構外	S3	-括	-	-	縄文土器	深鉢	脚部	42.2	黒雲(多)・透・白・黒・砂	良好	外:2.5387.3に5.5cm・黄 内:2.5386.3に5.5cm・黄	中期	

表2 繩文石器

遺物番号	遺構	グリッド	注記	標高 (m)	種別	器種	残存	幅 (cm)	横 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	材質	備考	
7 試掘	T-15	試HGM H25-41		-	石器	槍先形尖頭器 (未成品)	完形	6.1	4.1	2.2	53.8	赤色チャート	御白山跡 n	
8 試掘	T-23	試HGM H25-41 ローム		-	石器	槍先形尖頭器 (未成品)	先端部	0.7	2.9	0.0	2.4	砂岩軽質カルン フェルス		
9 SD01	S6	—		-	石器	6器 (未成品)	完形	1.5	1.8	1.5	1.3	黒曜石	高飛山産	
10 SF01	S9	No.9		53.650	石器	6種	完形	5.1	6.1	3.2	90.2	安山岩		
11 SF01	BD	No.13		53.679	石器	6種	完形	3.8	3.0	1.1	8.5	真岩	被熱	
12 潜溝外	S2	—		-	石器	6器	棒状石器	完形	24.8	5.4	2.0	408.6	綿雲母片岩	

察されない。

12は棒状を呈する石器である。断面形が両側面に刃部を有する梢円形を呈し、石劍の未成品にも見えるが、両端部に節理面が残ることから、棒状石器とした。頁状に節理する筑波石（綿雲母片岩）製の性質により剥離痕が剥落している。また、上端側面にわずかながら剥離痕らしき痕跡と、右側面下端部に敲打痕が観察される。

以上のほかに、被熱あるいは破碎縁が 664.1g・3 点、それらの痕跡を持たない縁が 120.9g・3 点が SF01 及び S3 グリッドで検出されている。これらは縄文時代の集石遺構を構成する焼け縁の可能性もあるが、判断できない。

第2節 道 跡

SF01

遺構　試掘調査の段階では本遺構の存在は明らかではなく、堆積土は自然地形によるものととらえられた。しかし、S0 グリッドで硬化面が確認されたことから道跡の存在が明らかとなった。

位置:調査区北西側、S0～S3、R0～2 グリッド。南西側の大半は調査区外、現道（市道 B7001 号線）の下に広がる。重複関係：SD01 と SK01 に切られる。

平面形状・走向方向：N-63° -W。S1 枕付近で南西側に弧を描いて向きを変える（北西端は SK01 西側の弧状の溝状遺構）状況がうかがえる。しかし、調査区北西壁の土層観察（試掘坑 A-A2 セクション）では、切り土整形された底面が硬化しており（A2 セクション第1層）、路面ともとらえられた。これを道跡の延長とすると、調査区北西端まで直線的に延びることとなる。ただ、この調査区北西端部分には、現代の造作（工事）による搅乱が存在する。道跡状の断面形と硬化面（同第 B-D-1 層）はこの造作による痕跡の可能性もあり、判然としない。

覆土：黒味を帯びた暗褐色土が堆積し、9 層に分層される。非常に硬く縮まり、土層断面観察箇所と平面的には十分に把握できていないが、スライスしながら掘り下げていく過程では硬化層（面）で形成されている状況が確認された。

路面・硬化面：平面的に把握したのは遺構確認面の最上層硬化面と、覆土掘り下げ後の最下層硬化面である。図示したのは最下層硬化面の状況である。最上層硬化面の広がりはほぼ、この最下層硬化面と一致している。最下層硬化面は明瞭に把握され、その範囲は一点破線で表示している。路面全体の断面形状は周辺レベルより皿状に窪み、盛土や疊敷き、波板状掘り込みなどの路面下部構造はない。**轍痕：**硬化面の北東側縁に沿って、溝状の轍痕が複数条重複して確認された。幅 10.8～

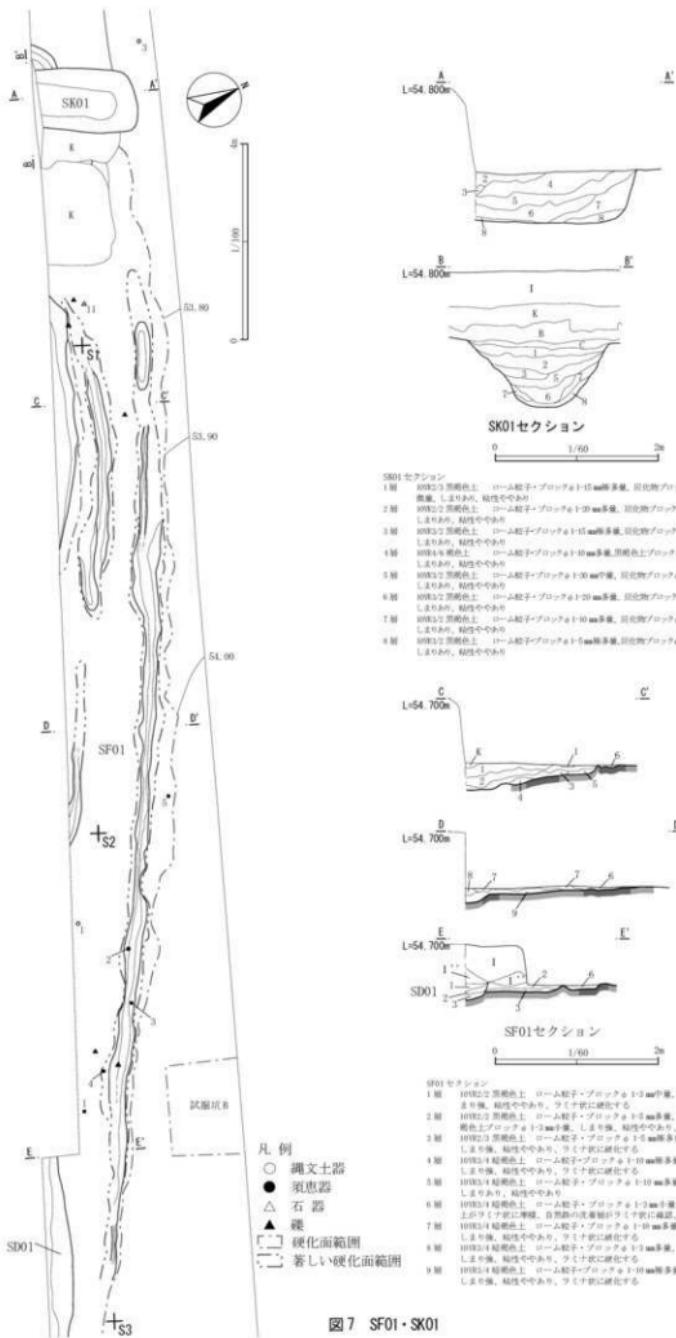


図7 SF01・SK01

54.8cm、深さ最大5cmほどで、断面皿状を呈する。底面はさらに著しく硬化している。この範囲は二点破線で表示した。概ね2条が平行するが、精査の結果、複数条の歴痕が重なり合って形成されている状況が判明した。2条の芯々間は約1.4mを測る。また、部分的に車輪痕と想定される細い溝跡が2か所で確認された(S2グリッド東側とR1グリッド西側)。幅9.7~14.5cm、深さ2~8cmを測り、断面は箱形を呈する。覆土は硬く縮まり、底面及び側面は著しく硬化していた。

遺物 繩文土器3点・56.0g、石器1点・8.5g、須恵器5点・15.5g、施釉陶器1点、青磁1点、鍾6点・767.0gが検出された。図示した須恵器は今回出土のすべてである。これらのうち、道跡に帰属するものは須恵器と陶磁器と判断される。陶磁器は確認面である最上層硬化面上で検出された。須恵器はいずれも最下層硬化面直上で検出され、この面を覆う第3層及び第6層の最下部に包含される。平面的にも3~4mほどの範囲にまとまって検出される傾向があり、後述する各遺物の特徴からも、ほぼ同時期に遺棄されたものと見てよいだろう。また、上・下硬化面間の覆土中からは遺物は検出されなかった。

陶磁器については取り上げる過誤によって所在不明となり、提示できない。発掘作業中の確認では、陶器は鉄釉碗の腰部破片、青磁は器種不明の体部細片であった。いずれも産地不詳であるが、近世以降の所産と判断されるものであった。

須恵器は図示したもので、1は坏の口縁部細片。2は部位不明の細片で、外面はほぼ平坦で2.5mm間隔の条線とナデ様の痕跡が認められる。内面はわずかに外湾する凸面を呈している。器壁の厚さから坏かとも思われるが断定できない。3は外面にヨコナデ調整が見られ、外湾するように見られるので、甕の頸部破片と思われる。4・5は内外面最終調整がナデの体部細片で、外面には平行叩き痕が認められることから壺と思われるが、3~5とも器壁が薄めであることから壺類の可能性もある。4は内面が凹面を呈するが、2.2cm以下の細片であるので、當て具痕の判断はできない。2は胎土に白雲母粒子を多量に含み、軟質焼成、白っぽい発色から新治窯産と推定される。3~5は白色粒子(長石・石英)を含む胎土や焼成、やや青味がかった発色の類似から同一産地と考えられる。1の坏も合わせ、常陸(県南)産と見られる。

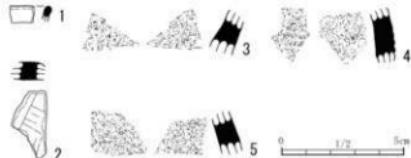


図8 SF01出土遺物

表3 SF01出土遺物

遺物番号	遺構	グリッド	注記	標高(m)	種別	器種	部位	最大径(cm)	重量(g)	胎土(含有物)	成・整形の特徴	焼成	色調	備考
1	SF01	S2	No.1	54.063	須恵器	坏	口縁部	1.0	0.3	透・白	口縁端部ヨコナデ	常元	100W/1 硬質	
2	SF01	R2	No.6	54.029	須恵器	坏	体部	2.8	2.6	白雲(多)・透・白	ナデ	常元	2.60W/1 軟質	新治
3	SF01	R2	No.5	54.056	須恵器	便・壺	頭部	2.4	3.6	透・白	外/ヨコナデ、内/ナデ	常元	100W/1 硬質	
4	SF01	S2	No.3	54.062	須恵器	便・壺	胴部	2.2	4.2	透・白	外/平行叩きナデ、内/ナデ	常元	100W/1 硬質	
5	SF01	R1	No.16	54.018	須恵器	便・壺	胴部	2.4	4.8	透・白	外/平行叩きナデ、内/ナデ	常元	100W/1 硬質	

*「胎土」白雲・白雲母・いわゆる銀雲母・透・透明粒子=石英・白・白色粒子=長石または石英

帰属時期 1～5の須恵器は諸属性から8・9世紀代とすることに無理ではなく、甕・壺類の丁寧な整形（ナデ仕上げ）もこれを支持する。縄文時代遺物以外の共伴はなく、須恵器は出土状況・遺物属性から共時性の高い安定的なまとまりが看取される。しかし、極少量の微細資料が散在しているのみであるという状況と、道跡という開放的な遺構であることからも、遺物の埋没時期については慎重な判断が必要である。

一方、その上面から近世以降所産の陶磁器が検出された最上層硬化面・路面についても、やはり同様で、自然堆積層が生成されやすい凹形の遺構とは異なり、覆土の形成と遺物の埋没時期については慎重な判断が必要である。最上層硬化面の上の堆積層については、大半は重機を用いた掘削であり、精査は行き届いていない。ただし、調査区壁面の観察によつても、その上位の明確な硬化面は確認されていない。

上下両路面の機能時以降の状況と、遺物の埋没状況を比較すると、最下層路面上の須恵器はその後の連続的な硬化層（面）の形成過程で包含されたものであり、最上層路面上の陶磁器はその後の路面形成の痕跡はなく、最下層路面に比べてより開放的な状況にあり、埋没過程・時期は不安定である。また、両路面は平面的にはほとんど重複する位置関係にある。最下層路面の下にはさかのぼる路面は存在しない。路面の形成過程、最下層路面の覆土は薄く、そこに8・9世紀から近世までの約1,000年の時間幅を読み取ることは至難である。

したがって、否定的な要素がある以上、両路面とも機能時期を断定することは控えておきたい。最下層路面については8・9世紀代を上限とした機能時期を、最上層路面は近世以降の機能時期を推定しておく。両者の機能時期は、あるいはともにほぼ同じで、古代・近世のいづれかであった可能性もある。

第3節 その他の遺構

SD01

遺構 試掘調査で把握された遺構である。位置：調査区南東側、S2～8グリッド。調査区南西壁に沿う形で走向し、東西両端は調査区外に延びる。重複関係：SF01を切る。

走向方向：確認範囲の東西端を結ぶラインの方向はN=65°-W。詳細には途中S4杭付近及びS5杭付近、S6-S7杭間で屈曲する。**形態**：S5杭西側の底面有段部分を境に、東西で断面形状と深さが異

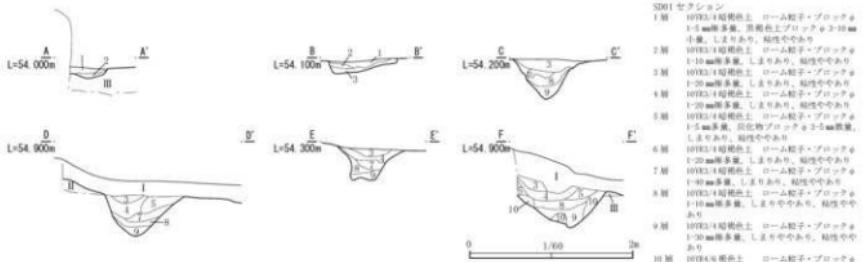


図9 SD01セクション

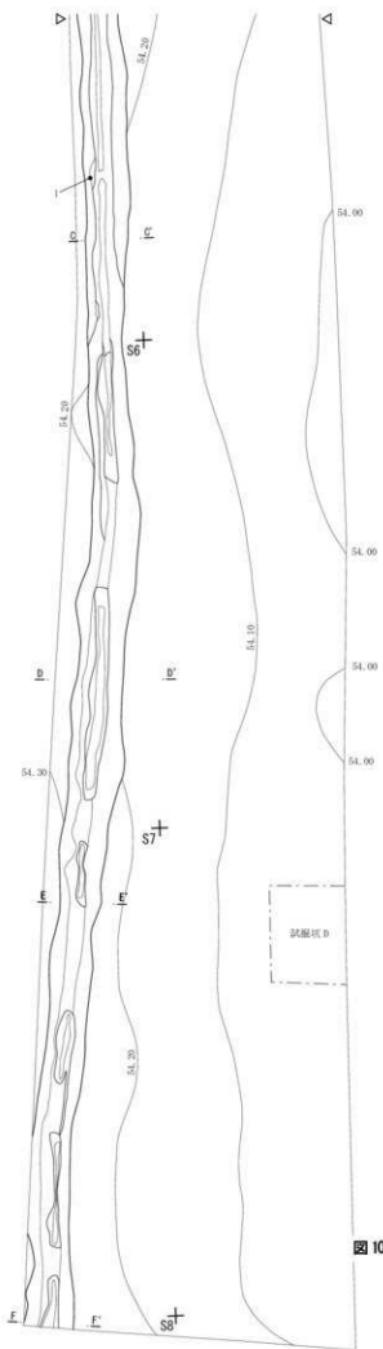
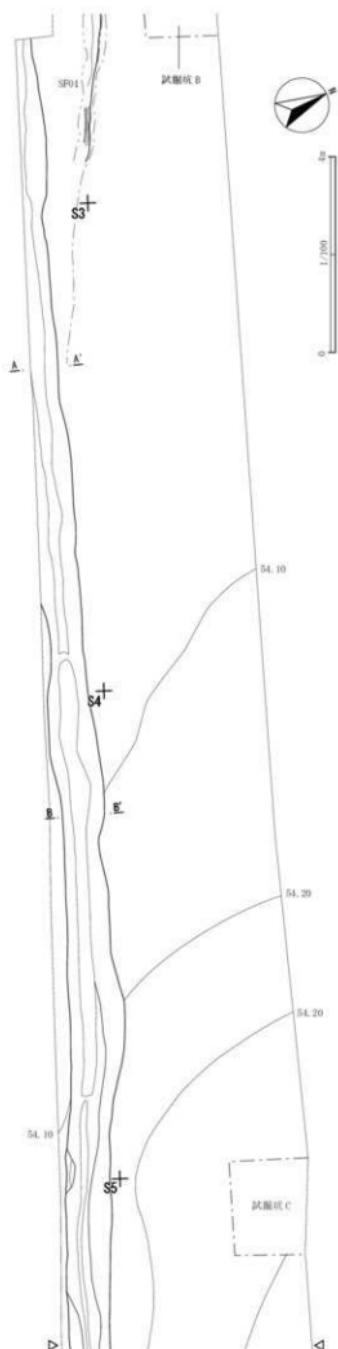


図10 SD01



なる。東側が深く、西側が浅い。東側は断面皿状で、幅 72.7 ~ 103.8cm、深さ 35 ~ 50cm。西側は断面 U 字形で、底面は部分的に箱形に掘り込まれた状況を示し、幅 65.2 ~ 99.8cm、深さ 15 ~ 50cm を測る。東西ともに底面は有段部分を除き、ほぼ平坦である。

覆土：東側はロームブロックを多く含む灰色味がかった暗褐色土が堆積し、3 分層、人為堆積。西側はロームブロックを多く含む暗褐色土が堆積し、7 分層、明らかな人為堆積を示す。東西ともに底面付近の水成堆積は確認されなかった。

遺物 S5 グリッド東側の覆土上層・第3層中位（セクション C）で、瓦（I）が1点のみ検出された。表裏両面ともナデ仕上げで、表面は滑沢な面を呈しておりヘラナデ状（あるいはケズリ）の条線が観察される。裏面は全面に複数方向の線状傷が入り、ケズリ成・整形痕の可能性もある。整形痕に叩き目や布目圧痕は見られない。両面とも平坦で曲面を形成しておらず、平瓦と判断される。胎土には白雲母の微粒子を含むが、含有物は少ない。これらの特徴から、14世紀以降の所産と考えられ、17世紀以降・近世の可能性が高い。

帰属時期 遺物は上記の1点のみであるが、本溝状遺構は SF01 を切っており、これより新しい時期のものであることは間違いない。また、1の瓦破片が包含されていた覆土は本遺構の最上層であり、本遺構の掘削あるいは周辺の耕作によって細片化して巻き上げられたものの流れ込みと考えられる。したがって本溝跡は近世以降となる。また、遺構の特徴と、東西の境界は土地分筆線に一致し、南側の道路に沿う位置関係から、公道と私有地（畠）との地境溝と考えられる。ただ、試掘調査時の本溝跡南側（現道側）に硬化ブロックを確認していることから、道路の側溝も兼ねるものであった可能性がある。SF01 の最上層路面との関係と上記の状況を考慮すると、現代に降る遺構と考えられる。



図 11 SF01 出土遺物

表 4 SF01 出土遺物

遺物番号	遺構	グリッド	注記	標高 (m)	種別	器種	部位	最大長 (cm)	重量 (g)	胎土 (含有物)	成・整形の特徴	焼成	色調	備考
1	SF01	S5	Na I	54.137	瓦	不明	破片	2.9	16.1	白雲（多）	ナデ・ケズリ	還元 焼成	1077/1 灰質	

*「胎土」白雲：白雲母・いわゆる鉱白雲

SK01

遺構 位置：S・R0 グリッド。調査区西端、南側は調査区外に及ぶ。重複関係：SF01 を切る。平面形状：隅丸方形。断面形状：底面周辺がやや丸味を帯びる逆台形。底面はほぼ平坦。主軸方向：N-27° -E。規模：長さ 201.0cm 以上、幅 130.3cm、深さ 65.4cm。覆土：やや大きめのロームブロックを多く含む暗褐色土、8 分層、人為堆積を示す。

遺物 検出されなかった。

帰属時期 SF01 の最上層硬化面を切ることから、近世以降の所産と考えられる。

第5章　まとめ

本調査では、瓦会街道・宇都宮街道と通称される道の旧道に比定される遺構が確認された。本章では、この街道と調査により確認された道跡について考察・検証していきたい。

明治30年陸地測量部測量の迅速測図では、嘉良寿理字宮本所在の貴船神社の周囲等に一部現道と異なる箇所が見られるが、本道が確認される。迅速測図との照合と、「元文二年」(1737)の建造時期が示される石標が本道の起点(市内若松三叉路)に存在することから、既に近世には本道が機能し、「瓦会街道・宇都宮街道」と通称される道が現在と同様に、石岡市街の北側より瓦会を経由し宇都宮へ至る道として認識されていたことが言える。なお、元禄9年(1696)から同15年(1702)までの期間に作成された元禄国絵図には、本道に該当する道は記載されておらず、このため本道は幕府の御用に公用道として使用されることなく、道の通称は近世以降の石岡市域の認識による呼称であったと言える。

中世に遡ると、当該地域が交通の要衝であり、城館群に内包されていることは第2章で述べたとおりである。本遺跡と道跡に注目した場合、着目すべきは隣接する嘉良寿里経塚の存在である。経塚は經典を埋納して後世に伝えることを本来の目的とし、一方で災害、伝染病などの難を避けるために、信仰心を経塚の造営で示すモニュメントとしての機能的な側面も持つ。つまり、交通路の安全を直接的に祈願することもあるが、交通路や信仰上の標識的な場所に象徴的に置かれる性格を持つ施設なのである。本遺跡に近接する場所にこの経塚が存在し、納められた銅経筒に大永三年(1523)の年代が確認されることから、周辺に城館が築かれた時期には本道が概期に主要な道として存在していたと推測される。

奈良・平安時代には、瓦塚の瓦窯より常陸國分寺・尼寺へ瓦を運び使用していたことが明らかにされつつあり、本道は、この瓦の運搬に使用された道として比定されている。その根拠として、沿線に瓦が散布すること、瓦窯より国府への最短の経路であることが挙げられている。²¹⁾再び迅速測図を参照すると、本道が瓦塚窯跡より尾根状の地形の頂部付近をたどりながら微高地を通過し、国府城に至ることが確認される。そして湿地や山王川の源となる柏原池を避けて通っていることが見て取れる。

さて、本調査で確認された道跡では、重複して上下2層の硬化面が確認された。第4章2節で示したとおり、機能した時期については判断材料が乏しく上層が近世以降であることが言えるのみである。確認された轍痕からは、車幅140cmの荷車の往来が想定される。西宮一男氏が実施した聞き取りによると、瓦会より石岡までの間に人馬の休息所が2軒設けられ、大正の末ごろから昭和にかけて荷馬車の往来があったとのことである。²²⁾近世以降に使用された人力による大八車は車台の幅が約82.5cmであるので、本調査で確認された轍痕からは、牛馬による大型の荷車が想定される。

本道は、今までに地理的な考察から創建以降、国府・国分ニ寺と所用瓦を生産した瓦塚窯跡の生産瓦を運搬した道として推定されてきた。今回の発掘調査では、道跡が確認され、その機能時期について断定する成果を得ることはできなかったが、8・9世紀代の遺物の検出から、本道が古代にさかのぼる道であった可能性が高まったと言うことはできよう。



図12 「瓦会・宇都宮街道」と周辺の環境

註1 『八郷町の埋蔵文化財一瓦塙史跡整備事業への提言』において詳細な場所については記述がないものの、著者が瓦の採集を実施したこと、道筋より古瓦が発見される例が周知されていたことが示されている。

註2 前掲「註1」文献

同時に実施した踏査では、貴船神社と嘉良寿里経塚の周辺の旧道が6尺（約198cm）から9尺（約297cm）とのことである。

註3 車台の長さが8尺（約244cm）、幅が2尺5寸（約82.5cm）のものを大八と呼び、車台の長さ1丈（約330cm）のものは大十と呼ぶ。

【参考文献】

平凡社『日本歴史地名大系 第8巻』1982

福井保「郷帳」（吉川弘文館『国史大辞典 第5巻』）1985

東京国立博物館『経塚一関東とその周辺』1986

丸山彌成「大八車」（吉川弘文館『国史大辞典 第8巻』）1988

八郷町教育委員会・西宮一男編『八郷町の埋蔵文化財一瓦塙史跡整備事業への提言』1988

茨城県教育出版『平田原道路——般県道石岡つくば線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書』1997

八郷町教育委員会・関肇編『八郷町の中世城館』2000

八郷町教育委員会・関肇編『八郷町の地名』2003

八郷町史編さん委員会『八郷町史』2005

千葉隆司「常陸国茨城郡衙の一考察—設置の背景を探る—」（筑波学院大学『筑波学院大学紀要 第5集』）2010

石岡市教育委員会・関東文化財振興会株式会社『野田館跡—農村交流基盤整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査』2013

茨城県教育委員会『茨城県歴史の道調査事業報告書近世編II』2014